

無常漂泊の詩心

松隈義勇

—『おくのほそ道』序章私見 「草の戸も」の句について—

はじめに

芭蕉が世を佐びた草庵の跡を尋ねて隅田川のほとりに佇んでみても、ありし世のたたずまいを偲ぶよすがはすべて空しい。かつて美しい水を湛えて芦荻茂り、月見の名所と謳われ、芭蕉の賞でた三股のあたりの佳景も夢の如く消え去ってしまった。今やコンクリの護岸の壁に閉じ込められ、黒ずんだ大量の汚水が澱んでいるのみである。隅田の流れも無常流転の理りを囁いているかのようである。星霜移り流れて三百年、なんと変り果てたありさまであろうか。

世の姿は変わっても、芭蕉の芸術とその心とはまだ滅びてはいない。空を行く雲の姿、地を過ぎる風の声に誘われて、この現実を離れて遠くへ旅したいと思うとき、世の絆を逃れていずこかに安息のひと時を見出だそうとするとき、私たちは魂の奥処に「月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人也。舟の上に生涯を浮べ……」という、あの朗々の韻きを聞くのではないか。

一 旅を栖とす

中世以降多く書かれた紀行作品を見渡しても、いずれも冒頭に己が経歴、境涯、人生観等を吐露し、旅に出る所以を述べるのが一つのパターンとなっているが、旅そのものの意義について、宇宙或いは人生と関連させつつ真向から説示したものは見出だせない。旅の文学という点、何よりもまず『おくのほそ道』が思い浮べられるのも、ここにその最大の理由があるといふべきである。

初めに「月日は」「行かふ年も」と、宇宙的、永劫時間的な視点から万物流転の理法を叙し始めていて、その印象は甚だ高遠にして、荘重である。「月日は百代の過客にして」は周知の通り李白の「春夜宴桃李園序」中の一節「夫天地万物之逆旅、光陰百代之過客」から取ったものだが、この一節は西鶴の『日本永代蔵』や大淀三千風の『日本行脚文集』などにも引用されていて、当代の俳諧師たちが愛誦した詩句と思われる。ところで、芭蕉は、「而浮生若夢、為歡幾何」と続く原詩にある享樂的な思想を切り捨て、人生即旅の哲学を述べるためのまくらにしたので、そこに逆説的な曲折があり、つまりは俳諧があるのだが、これが宇宙的な観想を喚起し、一編の冒頭として荘重比類ない力強さを發揮することになった。ま

た詩頭にある「天地万物之逆旅」を切り捨てたのは、何物にも不変常恒性を認めぬ、徹底的な無常觀を表出するためであつたらう。さらに「光陰」を「月日」と翻したのは、これによって空間に対する時間という意味の上に、人間社会にある、時間の区切りとしての「月日」の概念を導入して、次の「年」との対応を図つたのであり、かつはまた天象としての月球と太陽をも意識内に取込んで、これが宇宙空間の永劫の旅人であるとの印象を明瞭にし、強化することを図つていたのである。言語の多義性を利用した巧緻なあやなし方は、言葉の幻術師芭蕉の独擅場である。

宇宙間の万物は流転して止まることを知らぬ旅の様相を呈しているという、形而上的の觀想から、次には一転して形而下へ、即ち現実の人間世界に移つて、舟子・馬子という旅に關係していかにも下賤とされた業務に携つていた人々を叙した辺の呼吸は、俳諧的表現獨特の面白さである。その舟子・馬子についての叙述は「日々旅にして旅を栖とす」とある。「日々旅にして」は通説では「日々」を主語として「毎日毎日が旅であつて」と解されているが、私見では「日々」を副詞として「毎日毎日旅にあつて」と解くべきだと思つているが、それについては一文を草したことがあるのでそれに譲る。「旅を栖とす」は「無所住の旅に止住する」というような意味なのだが、とにかくそれは一種の矛盾陳述であり禪的な逆説表現である。この一節をもつて觀想は再び形而上的の思弁へ舞い上つて、宇宙の本質的なあり方を旅だとする、前の部分に連なり、宇宙の大理想法に従う人間の生き方は旅に止住することだという意を言外に示しているのである。なお、ここまでの所で次々と対句を疊んで句を成しているが、この漢詩文の句法を借りることによって、形而上的な

觀念に一層の莊重味を加えることに成功しているのが目につく。

さてこれから、思ひは主人公自身の上に及んでいく。宇宙の理法に従つた、旅に止住する生き方こそ人生のあるべき相であると觀念的に肯定した所で、すぐ端的に「自分も」とは言わずして、まずそういう生のあり方を歴史的に觀じようとする。「古人も多く旅に死せるあり」——「古人も」の「も」は先の舟子・馬子に対していうが、それだけでなく宇宙の運行を旅とする思想を持つことを踏まえて強調的に用いているのであり、かつ後の「予も」との対応を予想しているのである。「旅に生ける」と言わず「死せる」といった所は重要である。旅に止住する人生である以上は、旅に死するのが当然であるが、それだけのことでなく、作者が旅を死との関連において、死の影を帯びさせて觀じていたことを証するものであらう。そのように旅に死んだ古人としては、通説の通り李白・杜甫、西行・宗祇など和漢の旅人即詩人たる人々の系譜を想にのぼしているのだらう。それから自分もそういう系譜上に在る者という自覚をもつて「予もいづれの年よりか片雲の風にさはれて漂泊の思ひやまず」という。「いづれの年よりか」は麗化叙法であるが、ここについて尾形怱氏は「漂泊の人生が自己の宿命と化し果てた年月の長さを顧み嘆ずる情を汲み取るべきであらう」と註する。「おくのほそ道注解」『解釈と鑑賞』昭39・5)

「片雲の風にさはれて」もすばらしい表現である。「片雲の」の「の」は主格を表わすものとし、「片雲(ちぎれ雲)が風に誘われる如く」或いは「片雲が風に誘われ漂うのを見ては(見るにつけて)」「と解するのが通説である。そしてこの連用修飾句は「漂泊の思ひやまず」まで係るとする。語法的には首肯される見解と思うが、私はも

う一つ、側線のな解し方もできて、それが例の複線型文章構造の面白さだと思ふ。即ち「片雲の」を連体修飾格と見て「片雲の風」は片雲を吹き漂わす風の意と取れる。そして又この連用修飾句は「思ひやまず」までは係らず「漂泊」だけに係るといふ取り方もできると思ふ。「漂泊」は名詞であるが、動詞的機能を内蔵せしめていて「漂泊すること」の意味とも取れるのである。口訳としては「片雲が風に誘われる如く漂泊したいという思ひ」でも「片雲を吹く風に誘われて漂泊したいという思ひ」でもいい。この幾様にも解し得られる所から文章の味わいも深められているのだらう。この解は「風」といふ言葉の重要性を考える所から発するのである。「風」といふ語は芭蕉においては特別の意味を持っているといふことが言われている。例えば「一とせ思ひまふげさる辻風に吹さそはれて、みちのく出羽の境に槍笠破たり」(移芭蕉詞)「残生いまだ漂泊やまず、……猶どち風に身をまかすべき哉と……」(元禄三・六二〇付小春宛書簡)「身の行衛吹風にまかせ候へば……」(元禄四・一四句空宛)など。「風にさそはる」「風にまかす」とはつまり、己が意志のほかなる何ものかに誘われてさだめなき旅に出ることである。

旅に死んだ古人の系譜に連なるうと志しつつの、風に任せての旅であるとしたら、自分も旅に死ぬことを避け難い宿命と覚悟するのでなければなるまい。少なくとも、仮初に庵を結んだ河内の弘川寺で如月の望月の頃に花下の死を念じた素懷を果した西行の死に方や、年老いての旅の途上箱根山麓の客舎でふと命を終った宗祇の死にさまに做つて、奥羽北陸のみちの果てに屍をさらすのが、この場合の旅の本意と読み取るべきではなからうか。

ここで一言さしはさんでおきたいのは「漂泊の思ひやまず」で文

を終止させるか、読点にして下に続けていくかという問題である。読点にして下に係っていると見るのが、ほぼ通説である。文章の調子から見ても、意味の上からしても、語法的にも、確かにここで終止して下下に緊密に続いているようである。しかしこの一章の趣意からいえば、ここでかなり大きな切れ目になることも事実である。例の複線型二重構造の俳諧的文章の常道で、続くと共に切れてもいるわけである。ここで切れるとしてみると、冒頭からここまでがいみじくも見事な起・承・転・結の構成をなしている。「月日は」の一文が起、「舟の上に」の一文が承(この承はかなり飛躍した転換ぶりを見せているが、思想上は万象・浮生の流転を述べていて、承に違いない)、「古人も」の一文が転、そして「予も」の一文が結という工合である。そして、これで作者の漂泊の心についての思想叙述の核心は結ばれているのである。

構想の話が出た序でに言えば、序章全部の構成を見渡すと、冒頭からこの「やまず」までが一段落をなし、次に「取もの手につかず」(ここも続きながら切れている)までが一段落、以下が一段落、というように序・破・急の三段構成となつていふと思われる。

二 漂泊の思ひ

芭蕉は奥羽の旅の後に集中的に「漂泊」の語を用いた。例をあげれば、前掲元禄三年六月の小春宛書簡、翌年正月の正秀宛に「兎角拙者浮雲無住の境界大望故、如此漂泊いたし候間……」(「浮雲無住の境界」にも注目したい)、その翌五年二月の呂丸宛「其後上方辺漂泊」などがある。その他の時期にはこれに当る語としては殆ど「行脚」を用いている。奥羽の旅をも他の所で「奥羽長途の行脚」

というふうにいっている。行脚とはいうまでもなく仏道修行のための旅である。彼自身は僧籍に入っていなかったが、行脚に生涯を尽した能因や西行などの先人の行跡に倣おうとの意志がそう呼ばせたのである。(西行は自らの旅を「修行」と称した。)

「漂泊」という言葉は唐詩などに散見される。「漂泊来千里」^一、謳歌滿百城^二 (劉長卿)、「下亭漂泊 高橋羈旅」^三 (庾信) など。中でも目立つのは杜甫の詩に多く見られることである。杜詩中の管見に入つた二、三の句を順序不同に挙げてみると、

支離東北風塵際 漂泊西南天地間 (詠懷古跡五首)

即今漂泊干戈際 屢々 豺豕常行路人 (丹青引 贈曹將軍廟)

高雲薄 未還 泛舟慙 小婦 飄泊損 紅顏 (草閣)

「飄泊」と書いても殆ど同じである。また後素堂の『奥の細道解』に「杜詩に地分南北任流萍、註云任其漂泊、則南蜀中北長安也、是漂泊の解也」とあるのも参考になる。思うに杜甫の生涯ほど漂泊の語にふさわしいものはあるまい。芭蕉が杜甫に学ぼうとした跡は歴然たるものがあり、「漂泊」の語も恐らく杜詩から得たのであろう。そしてこの語を用いることによって、彼自らの旅を杜甫の如き漂泊の旅たらしめようとする心懷を表白したのであろう。

目崎徳衛氏がその著『漂泊』の中で「語の本質的な意味で漂泊とは精神の営みである」と言われる所が、芭蕉の場合の漂泊の本質を最もよく表わしているように思う。精神の営みとしての芭蕉の漂泊は、彼が故郷喪失者として伊賀を離れ、社会の秩序外の存在者たる俳諧師たるの道を選ぶべく決意した時から始まる。しかも秩序外生活者の世界に入りながら、一時はその世界での成功を夢みる矛盾を犯さなかったわけではない。恐らく江戸出府以後の和漢古典類の

貪婪な撰取もそのアンビシアな心の表われではなかったか。しかし漢詩文や中世隠遁草庵文学の世界を素材として撰取しようとして進むうち、やがてその世界を生活化しようという積極的態度に深まっていった時 (即ち前述の矛盾を一つのりこえ、一切を放下すべしと自覚した時) から、彼は彼自身の道を求め始めたのである。

わかりきったことだが、私は芭蕉独自の道、即ち精神構造とか思想とか生き方とかの根底は無常観にあるとの見方を改めて再認識せざるを得ない。その無常観は彼の生得の心的傾向を素地とするものでもあったろうが、その上に意識的ないし意志的に取り込んでいった面も多分にあったのだらうと思う。その契機となったものが、身近の者の死によるものか、或いは其角が指摘するように草庵焼亡の厄に機縁を發するものか、それとも仏教との邂逅、とりわけ仏頂和尚との邂逅によるものか、いずれとも決定はしかねる。そのどれもが結合されていると見るのが妥当だらう。ただ彼が心の師と頼む西行・宗祇等の行き方に学ばんと志しつつ、それら先人の精神の中核をなした無常の觀念を体得しようとする歩み進んだことが最大の契機であることは、確かだらうと思う。

とにかく芭蕉は無常観を核心として、世間離脱の無用者即ち隠遁者たる道を選び、この世を仮の宿りと観じ去って、一所不住の思いに徹しきろうとする。かくて行き着く所は漂泊を日常化する以外にはないという思念に止住する。彼の自覚としてはそれがまさに西行・宗祇等の先達の承譜に連なる、風雅の本質をなす一筋の道であると信じたのである。

いま、芭蕉の精神のあり方の全般を、説明するに便して、粗雑のそしりもあるが、左のような図式にして示しておこうと思う。

隠遁

漂泊
↓
無常

風狂

「風狂」は芭蕉の精神のあり方を風雅の面から示す重要な言葉であるが、『野ざらし紀行』の旅前後に最も色濃く示され、その後次第に深化されてあらわでなくなつた。

宗祇の「世にふるもさらに時雨の宿りかな」（ふるは世に経ると時雨の降るとの掛詞。この世の生を過すことも、ひと時の時雨を避ける仮の宿りを繰返すに異ならないの意）に唱和して「世にふるもさらに宗祇のやどり哉」（虚栗）と詠んだように、芭蕉は古人と全く同じ次元に立って漂泊の精神を体得することを生涯のモットーとした。いずかに住もうとも、いつもそこをひとときの「時雨の宿り」と覺悟して、旅にある思いに止住する精神的生活のありよう——それが漂泊である。それゆえ、さすらいないし旅するという実践的行動を伴わな
いままでも、例えば市隠という方も考えられるように、精神の営みとしての漂泊はあり得るわけである。つまり旅をしない漂泊者もあり得るといふことである。芭蕉も、その生涯を考えると、旅にあつた年月と、旅せず庵住していた年月とはほぼ半々であつた。

しかし内面的精神的漂泊者は必然的に漂泊の行動実践を迫られるはずである。芭蕉に「漂泊の思ひやま」ざるものがあつたのは当然であろう。その漂泊の旅に駆り立てる魂の奥の何物か、やむにやまれぬ情念の催しとでもいふべきものの存在に触れて「そぞろ神の物につきて心をくるはせ……」と表しているのは注目し値する。このえたいの知れぬ情念は、或いは元禄五年の「栖居之舟」に「風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや、風雅の魔心なるべし。なを放下して栖を去、腰にたゞ百錢をたくはへて柱杖一鉢に命を結ぶ」と書いた、その「風

雅の魔心」と別な物ではあるまい。芭蕉にとつては風雅に生活を賭けることと、漂泊の人生を生きることは、全く一つになつていたのだ。そしてそうした生涯の果てには野ざらしとなるべき運命が待っているという諦念の中にいた。

以上に述べてきた芭蕉の漂泊とは、まとめてみれば、(一)無常観に根ざし、(二)隠遁の思いと相伴い、(三)人生即旅の觀念に基づくものであり、(四)伝統的な精神として受けとめられ、(五)旅に死するの諦念をひそめ、(六)一所不住の、風にまかせての漂流であつて、(七)精神の営みとしてある、というように要約できるであらうか。「おくのほそ道」の序章は、こうした芭蕉自身の精神世界の有り様を踏まえて、詩的に構成、叙述されているのである。

それにつけて言い添えたいことがある。漂泊という語は本来詩語・文学語という性格を持った言葉である。芭蕉が旅を表すに漂泊の語を用いた時、旅は詩化されていたのだ。或いは詩材化されていたのだ。それは芭蕉が理念化された旅をうたう詩人であつて、紀行作家ではなかつたことと表裏をなすものである。

三 白川の関こえん

以上のように第一の段落(序)においては、万物流転の世界観に基づく、人生即旅の観想に立つて、旅に生き旅に死んだ古人の伝統を継ぐ者としての自覚において、不断に漂泊の思いに止住する主人公の心境を述べたのである。

これに続く第二の段落(破)は、破といふべく余りにも軽やかになるが、具体的にこれまでの漂泊を追懐し、再びみちのくの旅へ誘われるやむにやまれぬ心懷を述べる。「漂泊の思ひやまず」に付け

て「海辺にさすらへ」と表現した(漂泊の文字に水の縁が想起される)。

「海辺」には陸地のさいはての地の語感もある。「さすらい」は「漂泊」と同義語であるが、「漂泊」のもつ重さと悲愴性を欠き、精神の営みというニュアンスもずっと乏しい。

「去年の秋」以下「年も暮」までは次に繋ぐための叙述であつて、「漂泊の思ひやます」からの直接の文章の流れは「春立る霞の空に、白川の関こえんと、……」と続けて読んでいきたい文脈である。そうあつてこそ、こんどの旅が漂泊の思ひに誘われての、やむにやまれぬものだという気持が通ろうというものである。「そぞろ神」は疑義もあるが、とにかく後の「道祖神」と対をたす一語と見るべきだろう。

「春立る霞の空に」は解釈上問題の箇所である。これについてはかつて私見を述べたことがあるのでそれに譲るが、要するにここは、「やゝ年も暮」を受けて春が立ったということを言つたまでである。それを、例の能因の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白川の関」(後拾遺集)を踏まえ、関の縁で霞の語を出して、都を旅立つことと霞が立つことを言い掛けたのであつて、そうした修辭が注釈者を戸惑いさせるものになつたのである。口訳を試みれば「立春を迎え霞の立ち始めた空を見るにつけ、早く旅立ちして、白河の関を越え奥州を巡遊しよう」というようなことだろうか。

「松島の月先心にかゝりて」は掛詞のあやもあるがとにかく素直な行文で、松島に奥羽の名所を代表させたのである。「もゝ引の破をつづり」から以下は奥羽の旅へ旅立ちとうとするにあつたの具体的な用意方端を代表的な事例をもつて簡潔に叙したのである。

四 「草の戸も」の句

第三の段落(急)は旅立ちに臨んでの挙措行儀を述べ、発句をもつて締め括つている。「住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」は大体事実即しした叙述と見られる。従つて「住る方」とは深川にあつた芭蕉庵をさすのは明らかで、これを誰か家族持ちの人(曾良書簡に徴すれば平右衛門と言つたか)に譲つた模様である。「杉風が別墅」が杉風の別業採茶庵をさすというのはほぼ定説である。旅仕度するのに便利な採茶庵に早目に移つたのだから。採茶庵は芭蕉庵に程近い六間堀西側にあつたと考証されている。

庵を出るに際して、

草の戸も任替る代ぞひなの家

の句を発句として仕立てた表八句(百韻連句の一枚目の懐紙の表に書く八句)を記した懐紙を庵の柱に掛けておいたという。これは俳諧社会の儀礼的作法であつたが、事実だつたかどうかは、脇以下の七句も残されていず、明らかでない。

この句については違う句形が伝えられている。それは「草の戸もすみかはるよや雛の家」とあるもので、普通初案形とされる。所伝資料によつて異なる前書が添えられていて、真蹟短冊には「むすめ持たる人に草庵をゆづりて」とあり『世中百韻』には「はるけきたびの空おもひやるにも、いさゝかもこゝろにさはらん、ものむつかしければ、日比住ける庵を相しれる人にゆづりていぬ。このひとなむ、つまをぐし、むすめまごなどもてるひとなりければ」と詳しく、この句のできた事情についてはほぼこれで明らかである。

ところで、「よや」の形が果して初案で、『おくのほそ道』中の形

が成案かということになると、後に触れる富山奏氏の見解では初案・成案の関係でなくて、異形として並び存すると見るべきだという。いずれにしても『細道』の中でだけ「代ぞ」となっていることは注意を要する。「よや」なら単なる詠漢であるが、「代ぞ」となると後述するように深切にして強力な語勢が響き出る。

表八句を掛けたのが芭蕉庵か、それとも採茶庵か、また吟詠は出庵の前(雑祭の家)の情景は想像ということになる)か、出庵後(雑祭の情景を眼前に囑目した)かという点で説が分かれる。

そんな問題がある上に、句意も主旨が容易に掴めない。この句については宇和川匠助氏、富山奏氏にそれぞれ精細な論文がある。宇和川論文(『草の戸も』解釈諸説の批判と紀行本文と句との関係について)『運歌俳諧研究』15号・昭和32・12)は、『細道』本文に即する限りこの句は出庵直前に詠まれたもので、雑祭は想像と解すべきだが、本文を離れば雑祭を眼前にして詠んだという解し方にも捨て難い愛情を感じるといふ。そして余りにも莊重な序草の文章中に据えられたがために、句と文との渾融に隙間を生ぜしめたのだとする。これに対して富山論文(『芭蕉の発句』草の戸も住替る代ぞひなの家)考』『近世文芸』30号、昭和54・2)は、あくまで『細道』本文に即して解すべきだと全く眼前説を斥け、「代ぞ」の「ぞ」に、草の戸に言い聞かせているようなひびきがあるという大谷篤蔵氏の見解(日本古典文学大系『芭蕉句集』頭註)に注目した上で、しかし言い聞かせる対象は草の戸でなくて己自身に向って説示しているのだとする。即ち「流転の浮生に対する自覚自戒の心」を主題として読み取るべきだとするるのである。

説得力ある富山論文に対しては加えるべき何物もないように思え

る。ただ蛇足を加えるならば、富山氏は大谷氏の頭註の後半にある「今までと違って花やかなるべき草庵の前途を祝ってやった句になる」という箇所を引用しながら「祝ってやった」という点に關しては触れる所がない。けれど『細道』本文に即するとすれば、儀礼作法的な作意を持つこの句には祝福祝儀という挨拶的な要素もあることも否めまい。ただし祝いの挨拶ということなら、むしろ「よや」の形の方が適切である。「代ぞ」の形においてそれを求めるのは、いささか無理のようにも思われる。

この句は表面的に一読した所では、世外の人の住居だった草庵から賑やかな世俗の人の住家に変ったという、その流転変易の代の流れに対する感懐が主題と見える。この場合においては「雛」も花やかさのうつろい易い物として浮生の変転の暗喩であろう。蕉門俳人に「明日知らぬ雛の榮耀やけふの桃」(支考)や「振舞や下座になはる去年の雛」(去来)などの句があるのが参考になる。「雛」は祝意の表徴ともなれば、無常流転の代の相の暗喩ともなり得るのだ。この表面的解釈に立つ場合は、説示の対象は自分を含めた無限定の人である。だから「ぞ」でなくて「よや」という単なる詠嘆であつてもよいのだ。

ところがその「ぞ」の対象が自己自身だけに限定され深められる時には、代の変易を自ら納得してこれを受容し、もともと捨てるべきであった草庵を出離して漂泊の旅に出る時期がいよいよ来たのだと自分に言い聞かせ、覚悟と決意とを新たにしているというひびきが出てくる。

しかしてその覚悟には、野ざらしたるべき諦念が裏うちされているとすれば、この句には辞世という意味も持たせているのだろう。

こうして、この句を撮えることによつて、万象流転の理法の認識に基づく人生即旅の觀念と、そして野ざらしたるべき漂泊の旅に出で立とうとの自覚決意という序章全体の主題をがっちりと締め括っているといえよう。

ただこの句は余りに多くの要請を満たさざるをえない使命を負わされた結果、理詰めになり、明瞭さを欠き、詩的燃焼度が十分でなかつた憾みは否定し難い。

さて序章全体についてだが、この章は『細道』全編の総序もしくは大序といふべき位置にあつて、主題を総括的に述べると共に、全編をその光被下に置いてるのである。しかして次章旅立ちの条と相結んで、遙かに終章末尾との間に見事な照応をなして、無限漂泊の生の相をうたいあげてもいるのである。その首尾照応の構想美は、つまる所は「草の戸も」の句と「行春や鳥啼魚の目は泪」の句とが、末尾の「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」の句との間にいかに絶妙な照応をなしているかということに帰するのである。

おわりに

芭蕉が奥羽の旅に出る時住み捨てた芭蕉庵ほどの辺にあつたのであるうか。隅田川にかかる清洲橋を渡つてすぐの清澄一丁目の都バス停留所から北へ折れて小工場や小倉庫などの建物の並ぶ通りを少し進むと、まもなく淡緑色の綺麗なアーチを持つ橋が見えてくる。これが小名木川にかかる万年橋である。橋の上手に赤い水門が聳え、下手に目をやると、もうそこは隅田川で、小名木川が注ぐともなく合流して濁つた水が波打っている。風趣を賞された三ッ股もこの辺かと慨嘆の情を催す。橋を渡り切ると左袂に小遊園がありそれ

について左折すると、右側三軒目程の所に小祠がある。路に面して形ばかりの鳥居、玉垣、鉄の扉。芭蕉稲荷神社と標示してある。小句碑やひ弱そうな一、二本の樹の立つ狭い境内の、向つて左手に小さな稲荷の祠、これと並ぶ小堂の内に小型の芭蕉の石像が薄暗い。場所柄といい造りといい、ここが芭蕉庵址かと一驚を喫して呆然とする。しかし土地の心ある人の手で漸くに確保された貴重な遺跡である。地番は江東区常盤一丁目三一―二。本當の庵址はもう少し東寄りかと考証されている。

芭蕉が諦視した通り代の変易は止まる所を知らない。何も彼も変り、やがて失われてゆく。数年前までは庵址の前の小道路の突き当りの護岸の堤防上によじ登ることができて、そこから隅田川の大景を見渡せた。川風はいつも寒いが、ある春の終りの頃の夕暮どきにぶつかったことがある。川の水面に夕照が流れ、対岸の日本橋から浅草にかけての辺りが暮靄に蔽われて、少しく往時を偲ぶことができた、そのなつかしさは今に忘れられない。

庵址を出て、万年橋通りを北に向つて少し行くと、左側通りに面して昭和五十六年春開館予定の江東区立芭蕉記念館の瀟洒な白い四角の洋館がある。裏手は隅田川に直面する。地番は常盤一丁目六。都内で芭蕉を記念する唯一の公立の施設である。

〔註〕

- (1) 『おくのほそ道』解釈上の疑義一(『解釈』昭和48・3)
- (2) 『おくのほそ道』解釈上の疑義二(『解釈』昭和48・5)